

まえがき

地球上には、七〇〇〇ともいわれる数の言語があることをご存知でしたか。この本は、人間は生涯にわたってそうした言語を習いおぼえ、失い、常に複数の言語と関わりながら生きているという認識のうえに書かれています。複数の言語と絡みあう人間の生と死について、編者らを触発してやまない、記憶に残る人、資料、物語のことを語っていきます。

書名の『複数の言語で生きて死ぬ』は、言語や文化の境界を超えるというよりも境界そのものにとどまり、境界に生き、死んでいく人々をイメージしました。

「境界」という言葉には、県境や国境の場合のように、一本の線で画すという印象が強いかもしれませんが。しかしこの本では境界を、可変的な幅を持つもの、ゆえに人がとどまりうるものとして描いています。広々とした道、あるいは川のような場、と言える

かもしれません。そこは異質なもの同士が交錯し混ざりあい、溶けあい、新たな何かが生み出される（かもしれない）場です。場としての境界は、きりきりと張りつめた線としての境界に、時には追い詰められ時には拮抗しながら、世界中で立ち現れます。そう、この本のなかで描かれる具体的な地点は日本国内だけでなく、フィリピン、ブラジル、韓国、ドミニカ、シリア、フランス、ジンバブエ、パラオ、イギリス、タイ、デンマークなど多岐にわたり、私たちはこうしたさまざまな場所での人生の一瞬に立ちあうことになるのです。

日常のなかには、いくつもの言語や文化が重なりあう瞬間があります。

自らにとって異質な言語の学習は、時に人生を大きく変えていきます。

人は、社会や歴史と複雑に絡まりあう言語に束縛され翻弄されながらも、また言語によって、道を探り拓いていきます。

この本で描きだすことができたのは、もちろん、何千何万もの出来事や葛藤、象徴的なケースのうち、編者らの知るわずかな例にすぎません。しかし、同じような例は、もしかしたら私たちのすぐ隣でも生じているのかもしれない。そうした例に敏感になりたい。そしてステレオタイプを凌駕する細やかな想像力を働かせることができるようになりたい。その想像力をもって、この世界を——七〇〇〇以上の言語が咲き乱れるこ

の世界を見つめ、生きていくことをしたい。編者はこの本でそれを願ひ、読者の皆さまをその想像力に誘います。

目次

まえがき iii

第一章 夢を話せない——言語の数が減ること…………… 3

言語の数は変化する／失われていく言語／支配－被支配の関係と言語シフト／
後光のようなもの

第二章 夜のパピヨン——言語の数が増えるということ…………… 21

言語を分けるもの／日本語というとまるで／夜のパピヨン／
エスキーナでオニブスをペガして

第三章 移民と戦争の記憶——ことばが海を渡る…………… 37

プロローグ／海を渡った日本語／海外の日本語の水脈と戦争／海を渡る人々／戦争の時代の「わたし」／人間の共通性／虚像に隠された顔／過去を引き継ぐ者として／痛みなことばを与える／エピローグ

第四章 ペレヒルと试试看——「隔てる」ものとしてのことば…………… 61

涙を流しながら／血溜りの中に／「かれら」の析出と「われわれ」との区別／踏み絵として、烙印として、抵抗の旗印としての言語

第五章 「あいだ」に、いる——言語の交差域への誘い…………… 77

金網の、あちらとこちら／『宝島』／『デフ・ヴォイス——法廷の手話通訳士』／『ジャッカ・ドフニ——海と記憶の物語』／おわりに

第六章 彼を取り巻く世界は、ほとんど無に近いくらいに

縮んでしまった——ことばの断絶と孤独…………… 97

リヨン駅で／アメリカン・スクール／自分だけに閉ざされて／希望としての対等可能性

第七章 「伝わらない」不自由さと豊かさ——複数の言語で生きるといふ現実……………

三つの場所での出会いと経験／バンコクは東京のようになってほしいんです／

お腹が痛いので、薬をもらえませんか／日系人は許してもらえない／

不自由と困難さはどのように乗り越えていけるのか

第八章 内戦下、日本語とともに生きる——ことばを学ぶ意味……………

ダマスカスの友／日本語の響きに魅せられて／内戦の恐怖と日本語／

内戦下、日本語とともに生きる／ことばを学ぶ意味

第九章 「韓国語は忘れしました」——人にとって母語とは何か……………

忘れさられた言語／シホさんとの出会い／外国語に順番はない／歩み寄ることば／

人が言語を持つ意味

第十章 こうもりは裏切り者か？——他者のことばを使う……………

裏切り者のこうもり／日本語を喋ることと、英語を喋ること／

政治的、社会的状況の変化と街なかに見られる言語／

日本から来ました、と言えない／和解

終章

複数の言語で生き死にするということ——人間性の回復をめざして…… 183

プロローグ／支配・被支配の関係——植民地・戦争・差別／

集団から個へ、対等と自由のための境界／複数のことばの活動によって生き死ぬとは？／

ことばの活動によって人間性を回復する／エピローグ

あとがき
203

第一章

夢を話せない — 言語の数が減るといふこと

七〇〇〇以上も数えられている言語の数が減る場合とは。

鍵になるのは、支配・被支配の関係と、

言語に冠された後光のようなものだ。

言語の継承が途切れるとき、何が起こるのか。

山本冴里

◆言語の数は変化する

世界にはどれほどの言語が存在するのか。統一された見解はないが、おそらくはたいいていの人が想像するよりはずっと多い。Ethnologueによると¹、二〇一九年一〇月はじめの時点で、世界の言語は七一一一を数えるという。けれどこの数は確定的なものではなく、一年前の同じ時期には一四少なかったし、さらにその前の年には、それより五つ多かった。

では、なぜ言語の数が変化するのだろうか。すぐに思いつく答えは、「地球上には、まだ探検しつくされていない部分があるから」というものかもしれない。確かに、言語多様性の点できわめて豊かだと言われるニューギニアやアマゾンの森林には、いまだ言語学者によって記録されていない言語が使われている可能性がある。しかし、それは言語の数を特定できない理由のごく一部にすぎないし、もしもそれだけなら、人類学者や言語学者による探求が進むにつれて言語の数は増える一方だろう。けれどEthnologueの数値（二〇一七年→二〇一八年）に見るように、その数は減りもする。

◆失われていく言語

リトアニアの首都にあるヴィリニウス大学には、大学内の美術室に、死んでしまった言語の墓が